

令和 3 年 6 月 21 日現在

機関番号：17301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23014

研究課題名（和文）ホワイトヘッド哲学とアナキズム思想を基盤とした美的存在論に関する研究

研究課題名（英文）Research on Aesthetic Ontology Based on Whiteheadian Philosophy

研究代表者

森 元斎（MORI, Motonao）

長崎大学・多文化社会学部・准教授

研究者番号：40846052

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000 円

研究成果の概要（和文）：ホワイトヘッド哲学における「具体性」「美的なもの」という概念と、アナキズムにおける「相互扶助」「自然」という概念を軸に据え、社会における紐帯としての「美」についてどのように論じられるのかを明らかにした。里山などでの生活基盤において労働が自然に働きかけをしていき、美的なものを探究していくことを明らかにした。ここでいう美的なものとは、人間が自然に適度に働きかけることによって生じる秩序のことであり、それによって生活が可能になるあり方である。過剰な自然への介入ではなく、生活や自然に強制を行うのではなく、受動的な存在としての人間という観点を具体的なものとして据え、自然と中動的に労働することである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

都市での暮らしではなく、里山での生活実践の中で、資本主義とは異なる生の営みを構想することで、私たちの生が一つではなく、諸々の可能性に満ちていることを社会的意義として成果を表した。その一方で、原理論的なホワイトヘッド哲学や歴史上の抵抗の運動史が一体どのように駆動していったのかを学術的にも明らかにした。そこには美的なものが中心に据えられているのである。

研究成果の概要（英文）：By focusing on the concepts of "concreteness" and "aesthetic" in Whitehead's philosophy and "mutual aid" and "nature" in anarchism, I clarified how "beauty" as a bond in society can be discussed. As a theoretical as well as a practical result, it was revealed that there is an aspect in which labor works with nature and explores the aesthetic on the basis of life in satoyama. The aesthetic here refers to the order that emerges when humans work moderately with nature, and the way in which this makes life possible. The aesthetic is not an excessive intervention in nature, but rather a specific perspective of human beings as passive beings, not forcing life and nature, while involving people, and then working with nature in a dynamic way.

研究分野：哲学

キーワード：ホワイトヘッド哲学 アナキズム思想史 美的なもの 相互扶助 自然 具体性 生の哲学

1. 研究開始当初の背景

代表者はこれまで、国内だけでなく、国外においても極めて重要な A・N・ホワイトヘッドの哲学、そして アナキズムの思想史を検討することで、自然/社会/人間の新たな調和的関係を構築するための思想的・理論的枠組みをつくることを研究の主な目的としてきた。 の A・N・ホワイトヘッドの哲学については、代表者は「具体性」という観点から一貫したパースペクティブのもとに読解し、研究を行い、博士論文をはじめ、論文や著書など形で世に問うてきた。これまでの研究は、いずれかの領域に定位した上で、ホワイトヘッド哲学の全体像が見えづらい状況にあったが、代表者のように、この「具体性」概念に着目することで、領域横断的な知の枠組みを捉えることができ、そこから文化の多様性・共生・美という現代社会にとっての思想的基盤を構築することを目指すことが可能になった。科学や形而上学、そして社会という異なる知のあり方が互いに結びついているだけでなく、異質な知の共存こそが創造的な知の根本にあるのではないかという「問い」が浮上した。

のアナキズムの思想史については、近代の到来とともに社会における矛盾が噴出したことを背景に、そこでの人間と自然、そして社会の来たるべき調和的関係を模索する思想として、アナキズムを研究してきた。この思想で展開された「相互扶助」という概念を再検討することで、私たち人間だけでなく、社会、そして自然との美的調和を図ろうとする思想潮流であることを明らかにしてきた。アナキズムは確かに 近代以降の思想ではあるものの、人間・社会・自然の調和的なあり方は、何も近代以降にとらわれるものではなく、近代以前から、ともすれば人間が自然・社会の一員として存在してからこのかた営まれてきた思考であるということを検討してきた。この意味で、美学や文化人類学的な議論も踏まえ、人間そのものの根源的な営為としてアナキズムを捉え、 の研究とともに考察を与えることで、異質な知の共存の中をまとめ上げる紐帯的な役割として「美的なもの」のあり方が問われているという観点を模索していきたい。

2. 研究の目的

上述してきたように、代表者はこれまでホワイトヘッド哲学とアナキズムの思想史の検討を通じて、コミュニケーションの前提となる共同体(コムニス)にかかわる思想を中心に、人間・文明・自然の新たな調和的関係を構築するための思想的・理論的枠組みをつくることを研究の主な目的としてきた。その枠組みの中心に「美的なもの」が存在し、そのあり方を探求していくことが望まれる。その問題の核心は、一様性・普遍性・同一性に依拠する近代社会から、多様性・特異性・生成変化が求められるポスト近代社会へと移行しつつある現代社会の枠組みに対し、理論的にも実践的にも重要な視点を提供していこうとする研究である。こうした観点に本研究の目的と独自性、そして創造性があると考えられる。

3. 研究の方法

研究方法として、文献を収集し、その読解につとめる。書籍購入のみならず、国内では手に入りにくい文献・資料を収集するために、各国・各地のアナキズム文献センターや、クレアumont大学、ベルギーにあるルーヴァン・カトリック大学の図書館へ赴く。そこで収集された資料の整理と厳密な読解に基づき、国内外の研究会・学会で発表を行った。コロナ禍であったため、いくつかの学会や研究会は中止や延期になったものの、インフォーマルなオンライン研究会では発表を行なった。例えば日本女子大学のマニユエル・ヤン准教授が主催されているアナボル研究会、明治大学の田中ひかる教授が主催されているアナキスト研究会などである。国外では、フロリダ国際大学のステファニー・ウェイクフィールド准教授が主催されている研究会、ナンテール大学のエリー・デューリング准教授が主催されている現代哲学研究会などである。またこれらに加えて、アナキズムの実践を行なっている諸外国のコミュン運動の場に赴き、そこで行われている美的なもの制作現場での諸実践について検討を加える予定であったが、ハンブルクに調査に行ったのみである。しかしながら、この調査の一部は2021年度の5月に刊行された代表者の単著で触れることができた。このように文献収集や国内外の諸実践の場所に赴き、国内外の研究会・学会での発表を行なった上で、論文として、国内外の学会誌に投稿を行い、研究成果を問う。これに加えて、書籍の形で、これまでの研究成果を発表し、哲学・思想の議論を広く世間一般にも還元できることが予想される。

4. 研究成果

これまでに発表されたものとして、ホワイトヘッド哲学とアナキズム思想を中心に、「具体性」「相互扶助」を論じるとともに、生活実践を「美的なもの」に据えながら、議論を展開してきた。とりわけ『文學界』(文藝春秋)で二年にわたり連載を行い、2021年度にはそれをまとめて単著として研究者だけでなく、一般読者に問うことができた。そこでは生活の有用なものとは、金銭の取り扱いだけでは決してなく、人と人との繋がりによってこそ、そしてそこに「美的なるもの」の審級が介入することによってこそ、取り扱いが可能になることを明らかにした。

またこれに付随する形で、農作業と美術作品との親近性や抵抗運動を明らかにし、フランスのLA ZADといった抵抗運動を扱い、青森県立美術館で開かれた展覧会に寄与した。ここで焦点が当たるのが「自然」と「生」との関わりである。これらに関しては具体的にはホワイトヘッド哲学だけではなく、大杉栄や鶴見俊輔、金子文子やデヴィット・グレーバーといった活動家や人類学者の議論をも検討していくことで、生活実践だけでなく、抵抗運動における倫理的な思考において、「自然」への人間の労働が「生」を豊穡にし、そうしたところにこそ、「美的なもの」があらわになることを明らかにした。

こうした検討に加え、ローカルな場所性に依拠するという問題系が立ち上がり、自然環境や労働環境によって、つまり広い意味での人間環境によって、生の検討課題が変わることが明らかになった。その点から、代表者の住う九州における「具体性」「自然」「美的なもの」「相互扶助」を検討し、『国道3号線』(共和国、2020)を上梓した。

西南戦争や水俣、炭鉱労働や、アジアとの交流、米騒動などを取り上げ、近代的なものとの摩擦によって生じた私たちの生のあり方が、以下にして、上述したターム（具体性・自然など）との関わりから分析が可能かを明確にした。

この他にも、原理論的な哲学としてホワイトヘッド哲学やドゥルーズ哲学における共同性のなかの個性性(自然の中の人間など)を明らかにした論文や、映画表象に関わるものとして、スパイク・リー作品やイ・ジュンイク作品、東アジア反日武装戦線などに関わる作品に関して、字取り上げ、「美的なるもの」を中心に検討を加えていった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Motonao Mori	4. 巻 6
2. 論文標題 Towards Incompossibility : The Philosophy of Whitehead in Leibnizian Deleuze	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 多文化社会研究	6. 最初と最後の頁 19 - 29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 森元 斎	4. 巻 73(4)
2. 論文標題 革命に至る極貧生活 第七回	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文学界	6. 最初と最後の頁 154-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森元 斎	4. 巻 73(6)
2. 論文標題 革命に至る極貧生活 第八回	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文学界	6. 最初と最後の頁 112 - 121
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森元 斎	4. 巻 51(8)
2. 論文標題 「力」のための覚醒剤 スパイク・リーのために	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 168 - 173
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森元 齋, 栗原康, マニユエル・ヤン	4. 巻 -
2. 論文標題 鼎談「いつも心に革命を われわれは「未開人」である」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 マニユル・ヤン『黙示のエチュード 歴史的想像力の再生のために』新評論	6. 最初と最後の頁 234 - 254
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森元 齋	4. 巻 73(7)
2. 論文標題 革命に至る極貧生活 第九回	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文學界	6. 最初と最後の頁 50 - 59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森元 齋	4. 巻 73(8)
2. 論文標題 革命に至る極貧生活 第十回	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文學界	6. 最初と最後の頁 202 - 211
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森元 齋	4. 巻 (848)
2. 論文標題 百年たって耳にとどく 鶴見俊輔と金子文子	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 図書	6. 最初と最後の頁 20 - 23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森元 斎	4. 巻 73(9)
2. 論文標題 革命に至る極貧生活 第十一回	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文學界	6. 最初と最後の頁 234 - 242
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森元 斎	4. 巻 73(10)
2. 論文標題 革命に至る極貧生活 第十二回	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文學界	6. 最初と最後の頁 128 - 137
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森元 斎	4. 巻 -
2. 論文標題 「生」の哲学者、大杉栄	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 INOCHI	6. 最初と最後の頁 110 - 111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森元 斎	4. 巻 -
2. 論文標題 農作業と自由	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 いのち耕す場所 農業がひらくアートの未来 青森県立美術館	6. 最初と最後の頁 70-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森元 斎	4. 巻 52-6
2. 論文標題 国家も社会も資本主義も、未来永劫分解し尽くすしかない 『金子文子と朴烈』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 181-185
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 14. 森元 斎	4. 巻 48-11
2. 論文標題 鉱物的な眼	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 246-250
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 16. 森元 斎	4. 巻 74-11
2. 論文標題 グレーバーからの負債	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文学界	6. 最初と最後の頁 294-295
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 17. 森元 斎	4. 巻 3467
2. 論文標題 ガバナンス、くそったれ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 18. 森元 斎	4. 巻 42-1
2. 論文標題 アナキストたちに学ぶ、楽しい働き方改革	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 BRUTUS	6. 最初と最後の頁 52-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 19. 森元 斎	4. 巻 76-2
2. 論文標題 抵抗とは生である	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 群像	6. 最初と最後の頁 309-319
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 森元 斎
2. 発表標題 水俣アナーキー
3. 学会等名 野生会議99 (招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 森元 斎	4. 発行年 2020年
2. 出版社 共和国	5. 総ページ数 268
3. 書名 国道3号線 抵抗の民衆史	

1. 著者名 アブドゥルラッハマン・ギェルベヤズ、葉柳和則、森元斎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 松本工房	5. 総ページ数 192
3. 書名 多文化社会学解体新書	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------